

多文化時代に求められる幼児期の言語教育

—エンパワメントを支援する観点から—

平野知見 (常磐会学園大学 国際コミュニケーション学部専任講師)

はじめに

本稿は多文化化が進む日本に在住するニューカマーの実態や先行経験から「幼児期の言語教育」が問われていることに着目する。そしてここを切り口として、これからの多文化時代において、幼児期のエンパワメントを支える保育支援とは何かを考えていこうとするものである。

日本における多文化保育が提起したもの

(1) 群馬県大泉町の先行経験

日本では1990年の入管法改正を期に、保育園でも外国人労働者の増加に伴い、外国籍の子どもが増えていく。2001年の日本保育学会でニューカマーを多数受け入れてきた長い経験をもつ群馬県大泉町の発表があったが、なかでも極めて重要な注目すべき新しい事実と思われたことは言語教育についての問題である。今までは「幼児は自然に言葉を覚える」また「幼児期における言語教育は必要ない」と考えられてきたが、この考え方は修正されるべきだという発言があった。つまり、これからは幼児期からの言語教育が子どもたちにとって必要不可欠だということである。

ところが、従来の幼児教育現場では、幼児に対する特別の言語教育は必要ないという考え方が大勢であった。ちなみに大場(1998)は、3歳未満児の場合は、まだ言葉を習得している途中か、これから習得していくのであるから、自然にほかの日本の子どもと同じように覚えていくのが普通であり、3歳以上児や、すでに母国語を覚えてしまっている場合でも、まわりの子どもや大人が日常生活の中で日本語を使っていれば生活に必要な言葉は覚えていく。また、言葉が話せなくてもジェスチャーやスキンシップで気持ちが通じることが多いし、保育のなかでは言葉の問題は特別の場合をのぞいて何とかやっていると述べている。

また鈴木(2000)は『『子どもの言葉は、生活しているうちに、次第に身についてくるので、遊びを多くしてやれば次第にひとりでも身につくものだ』という考えもまた多い』と言っている。実際、大泉町の保育

者たちも上述のように「何とかやっている」と考えていたので、幼児には特別に言語教育をしなくても、自然に周囲の大人たちが話す言葉を学んでいくと思っていた。よって、幼児たちに改まって日本語教育をすることなど考えたこともなかったという。ところが、幼児期のニューカマーたちに対して「自然に覚えらるるから」「何とかやっている」と放任し、系統だった言語教育をしないまま小学校に送り出すことには問題があるという事実が、時間の経過のなかで明らかになってきた。幼児期には、他の子どもたちと不自由なく通じあっていると思っていたニューカマーの子どもたちが、小学校に上がると、日本人の子どもとの言語能力上の落差が著しく、それが原因で学力面にも差が生じてくるという実態が明らかになってきたのである。大泉町の外国籍の保護者たちは、このような事実が目前に現れたことによって、幼児期からの言語教育の必要性を痛感しているという。

一方、教師たちは、幼児期の言語教育について系統立てて考えたことなどなかったと述懐していた。この大泉町の経験は、多文化保育を考える上で、極めて重要な問題を提起していると思う。つまり、従来の幼児教育の内容がニューカマーの到来によって問われているのである。「幼児は、放っておいても言葉を覚える」という一面の真理のみに全面的に安住して、「幼児期の言語教育」ということを本気で考えたことすらなかった日本の幼児教育界が、多文化時代のこれからも、このままで良いのかという問いかけである。

(2) 滋賀県の一地域における多文化教育の実態

そこで、ニューカマーの数の多さでは全国でも上位にある滋賀県の状況はどうであるか、調査を始めてみた。

滋賀県の小学校や保育現場におけるインタビュー調査により、外国籍の子どもたちを多く抱える現場教師たちの困惑や驚き、悲喜こもごものエピソード、積極的な取り組みと工夫など、彼らの生の声から、日本の教育現場に多文化教育の時代が到来しようとしているのを実感した。保育者や教師らは一様に、外国籍の子

どもたちと日本の子どもたちが共に学ぶ保育形態の模索は苦しいが、それにも増して、子どもたちが成長する喜びや保護者との間に築いていく信頼関係などは多文化時代がもたらす利点だと語っており、新しい時代の課題に積極的であることを感じさせられた。

しかし、言語教育に関する園長たちの答えは共通して「外国籍の子どもは、幼児期から日本の園に入れば言葉は問題ではない。5歳頃から入ってくる子には厳しいが」という程度で、特別に言語に関して配慮はしていないのが現実であり、外国籍の子どもに対して言語教育をしようと思っていない。ましてや、日本の幼児に対する言語教育の必要性など意識されていないのである。

(3) 多文化教育の本質を語る事実

群馬県大泉町も滋賀県も、いずれの保育者も言語教育に関しては日本の保育界を支配してきた「幼児は放っておいても言葉を覚える」という考え方をとってきた。ところが大泉町の場合、「それだけでよいのだろうか?」という問いが、外国籍の子どもの就学後の結果から突きつけられたのである。このことは、多文化教育の本質を語る上で見逃せない事実である。なぜなら、多文化教育とは、何かを教えることではなく、従来の教育を問い、改革していく運動だからである。この視点を明確に打ち出している中島（1998）の言説を借りるなら、「多文化教育とは、特別な科目や臨時のカリキュラムではない。それは、学習者の多様性を反映し、とくにマイノリティ生徒にとって不利にならないように学校環境を改善していく試み」なのである。さらに中島は、多文化教育とは「学校の機能や文化を批判してつくりかえる学校改革のための視点の一つ、不断に続くプロセス、運動」という見解をとっている。この視点に立つなら、まさに今、ニューカマーの子どもが保育所や幼児教育機関にたくさん入ってきて、その子どもたちが小学校に進学し、学童期に上がっていくという過程において、やっと従来の保育界に欠落していたもの、つまり、幼児期の教育方法の曖昧さが露呈し、問題点が問われ、再考と改善が求められていると言えよう。

幼児期におけるエンパワメント

幼児期に言語を確かに身につけないことが、就学後の学力不振や人間関係の稚拙さに連なり、実力を発揮できない人生を送ることを強いられる。この問題を考えるために「エンパワメント」(empowerment)とい

う概念に注目してみる。

これは、国際教育やジェンダー論、また人権文化の中で近年よく使われるようになった。平沢（2000）によると「差別や抑圧、あるいは社会の否定的なまなざしにさらされることによって、本来持っている力をそのまま出すことができず、いわば力を奪われた状態にある人が、その抑圧された力をいきいき発揮することで、能動的に自己実現や社会参加に向かっていくプロセスである。よってエンパワメントを『支援する』ことはできても、『与える』ことはできない」という。では、子どものエンパワメントを支援する方策を考える際、どのような切り口があるのだろうか。

例えば、平沢によると「生活環境」、「学習環境」、「子どもの主体的参加を促進するための取り組み」などがあり、子ども自身に企画・実施・評価を全て任せ、責任をもってプロジェクトをやりきる体験を増やすことのできるよう支援することが、子どもたちのエンパワメントにつながっていくのだという。

つまり幼児期における確かな言語教育を、エンパワメントを支援する方策として考えるわけだが、その場合、幼児が言語を「学ぶ過程」で「学ぶ喜び」を味わい、エンパワメントすることを保証するものでなければならない。

S 保育園のニューカマーの幼児の事例

S 保育園はモンテッソーリ教育の保育園であり、縦割り保育を実施している。次の事例は担任保育士によるニューカマーの幼児について報告した事例である。

私のクラスにいるE君（3歳児）はブラジル出身の子どもです。2歳児の時から入園してきました。今はもう大分言葉を覚えて保育士や友だちとも会話を楽しむほどになりましたが、以前はうまく言葉が通じなくていつもイライラしていました。また両親（ブラジル国籍）が朝早くから夜遅くまで仕事をしているので相手にしてもらおうことが少なかったようです。言葉が通じないイライラと両親にかまってもらえない不満のようなものがE君にはいつもあり、それを発散させるかのように友だちに暴力をふるったり、暴れたりすることが大変多かったのです。色々なお仕事（遊び）に誘っても全く興味を示すこともなく、友だちの邪魔ばかりします。半ば諦めかけていたよう

な状態で何ヵ月か過ぎてしまいました。そんなある日、E君が友だちの様子をじっと見ているのです。いつもは、朝登園してカバンを置くすぐに部屋を走り回ってしまうようなE君なのですが、その日は友だちの横に立ってじっと見ているのです。その友だちは「のり貼り」をしていました。今までも「のり貼り」をしている友だちは沢山いたし、E君に誘ってみたこともありました。全く興味を示しませんでした。しかし、その日は興味深げにじっと見ているのです。

次の日登園してきたE君はわき目も振らず真っ先に棚の方へ向かいました。E君はさっそく「のり貼り」のセットを持ってきて前日やっていた友だちと同じ図柄の「のり貼り」に挑戦していました。1枚出来るととても満足げで、その後何枚も他の図柄にも挑戦していました。このようなE君の行動は何日か続きました。またしばらくすると「のり貼り」以外のもの（縫いさし、切り紙など）にも挑戦するようになりました。その頃からE君は落ち着き始め、人の話も聞けるようになってきました。話が聞けるようになると言葉も覚えるようになってきて会話も少しずつ出来るようになってきました。今ではすっかり言葉や会話がうまくなり、友だちに暴力をふるうこともなくなりました。（S保育園の担任保育士による事例報告より）

まず、上記の事例について、二つの点に注目したい。一つは、E君というニューカマーの幼児の生活状況である。両親が朝早くから夜遅くまで仕事をしていてかまってもらえない。その上、言葉が通じない。この二つの悪条件が重なって、いつもイライラしている。多くのニューカマーの子どもたちは、この悪条件を担い、イライラし、その不満が様々な逸脱行為となって表面化している。すると保育士や他の友だちに「困った子」という印象を与えてしまい、悪循環を繰り返すことになる。その悪循環を断ち切る道を誰もが模索しているわけだが、この事例では、S保育園でE君が変わっていく過程に注目する。

二つ目に、このE君が変貌していった過程に注目したい。E君は、外国籍の子どものための特別の教育を受けたおかげで良い状態へと変わっていったのではない。このような子どもの変貌の仕方は、日本人の子どもにも共通している。ある瞬間に釘づけになるほど興味あることに出会った子どもに、それに取り組むこと

ができる環境が保障されている。その整備された環境において自分で取りかかり、自分の力で続け、やり抜くことによって良い状態へと変わっていった。悪条件の下で本来の力を歪めていた子どもが、立ち直り、安定し、友だちとも良い関係を結べるようになっていく過程を支えた保育環境に注目したいのである。つまり、日本の子どもに限らず外国籍の子どもも共通の道筋を辿ってエンパワメントする事実があるのであり、それを支える保育環境がモンテッソーリ教育には含まれていることに注目するのである。

おわりに

多文化時代に求められる幼児期の言語教育とは、まず、感覚が敏感で随意筋肉運動を調整する時期にいる幼児が、喜んで積極的に自分から言語を確実に習得していけるような保育環境を整えなくてはならないということである。そして幼児の内面にある「成長のプログラム」「学ぶプロセス」「学ぶ喜び」を支援する系統的・組織的なプログラムを意識的に大人が実践しなければならない。つまり幼児期にこそ十分にエンパワメントできる環境と支援が与えられるべきなのである。多文化時代がより重要視される今後に向けて、言語教育を視野においたエンパワメントを支援する幼児教育を、今真剣に考える時期にきているのではないかと思う。

引用文献

- 大場幸夫『外国人の子どもの保育』、萌文書林、1998年
 禊美佐子「言語教育」『モンテッソーリ教育：理論と実践』、第5巻、学習研究社、1981年
 荻谷剛彦「米国の子ども中心教育の失敗を日本で繰り返すな」『論座』、11月号、朝日新聞社、2001年、pp.108-119
 相良敦子「モンテッソーリ教育学と正常化」『モンテッソーリ教育』、第3号、日本モンテッソーリ協会、1970年、pp.25-35
 相良敦子「モンテッソーリ教育の特殊性と普遍性：その限界と寄与」『研究紀要』、第11集、聖母女学院短期大学、1982年、pp.114-124
 ジェームス・A・バンクス 平沢安政（訳）『入門多文化教育：新しい時代の学校づくり』、明石書店、1999年
 鈴木祥蔵「子どもの言葉を育てる」鈴木祥蔵・堀正嗣（編者）『人権保育カリキュラム』、明石書店、2000年
 中島智子「オーストラリアの多文化教育と学校改革」『多文化教育：多様性のための教育学』、明石書店、1998年
 日本保育協会（編）『平成11年度一保育の国際化に関する調査研究報告書一』、日本保育協会、1999年
 平沢安政「子どもがエンパワーする人権教育研究プロジェクトについて」部落解放・人権研究所編『子どものエンパワメントと教育』、解放出版社、2000年、pp.9-18